

地域の「外国人と日本人の対話の場」における相互行為

杉原 由美

1. はじめに

1990年以降、バブル経済と出入管法改正を背景に急増した外国人に対する日本語教育に、地域住民が関わる活動が盛んに行われるようになった。本研究は、現在、地域の日本語教育で提案されている「外国人と日本人の対話を通じた相互理解、相互学習の場」（以下「外国人と日本人の対話の場」と呼ぶ）の実践における相互行為を対象とし、参加者の関係性に焦点をあてて分析と考察を行うものである。

2. 先行研究

国内日本語教育ネットワーク調査報告に基いた「地域日本語教育に関する提言」（尾崎他 2000）では、多文化共生の地域社会の実現を目標とし、同じ地域社会に住んでいても外国人と日本人の出会いが少ないことを踏まえた上で、両者が「教える—学ぶ」関係ではなく相互に学習するという対等な立場で出会い、対話を通じて問題を共有し、人間的なつながりを強めていく場の必要性を主張している。このように「教える」ことを排除し、参加者全てが対等な関係であることを意識する交流主体型の教室は増えてきているというが（足立・松岡 2001）、理念的な議論や実践の概要報告以外で、活動を実証的に研究した報告は見当たらない。

一方、異文化交流講演会や日本語ボランティア教室、留学生へのラジオインタビューという形での交流の場については、吉川（2001）、河野（1999）、西阪（1997）がそれぞれエスノメソドロジーの視点で相互行為を分析している。これらの研究では、「異文化性」を志向した「〇〇人、××人」という関係性でのやりとりは、参加者たち自身が知らず知らずの間に、その都度協働で相互達成的に形成するものであり、はじめから「〇〇人、××人」というカテゴリーが規定されているものではないことを明らかにしている。つまり、参加者の行為や発話いかんによっては、「〇〇人、××人」というカテゴリーはいつでも他のカテゴリーに転換する可能性があるといえる。しかしながら、留学生へのラジオインタビューや異文化交流講演会において「〇〇人、××人」という関係性を志向する力は強力であり、日本語ボランティア教室では時には外れる場面も起こり得るが、3つの場とも

に、「日本人」「〇〇人」「外国人」といったカテゴリーを参加者たちが協働で維持している様子がみられるのである。

3. 研究目的と課題

では、本研究対象である「外国人と日本人の対話の場」では、参加者はどのようなカテゴリーでの関係性を形成するのであろうか。この場では「多文化共生」や「人間的なつながり」を強める「相互理解」を目指すため、「〇〇人、××人」といった一面的な関係性のみで固定されることなく多様な関係性で対話が行われるかどうか問題となってくる。そこで、本研究では、「外国人と日本人の対話の場」において、多様な関係性での相互行為が実現していく方策を探ることを目的とし、次の2点を研究課題とする。①相互行為の中で、参加者は互いにどのようなカテゴリーで関係性を形成しているのか。②その関係性形成のプロセスを推し進めているものは何か。

4. 研究方法

対象は、東京都内某大学の周辺地域住民対象の「外国人と日本人の対話の場」で、2000年11月から2002年6月現在まで、基本的に2週間に1回2時間、当該大学の教室で行われている。毎回、参加者のうち1名の担当者が話題を提起して話し合う。本研究では、2000年12月から2001年3月の8回分の録音文字化資料のうち、4回の「出席者全員参加の話し合い」を対象データとする。話題は「主人という言葉」「テレビの影響」「くだらない風習・習慣」「子供の教育について」であり、参加者の属性は以下のとおりである。

出身	日本×10、イラン、インド、韓国、フィリピン、中国×2 (滞日5-14年、主に2001年3月時点でOPI上級下と上級中)
年代	20代～70代
性別	女性約15名 男性1名
職業	専業主婦、自営業者、定年退職者、パートタイム就業者、学生

分析は、エスノメソドロロジーの会話分析の方法で行う。Sacks (1972, 1995) の成員カテゴリー化に関する概念を用い、Schegloff (1991) の制度的状況の相互行為を分析する方法に従う。

成員カテゴリーとは、参加者が会話の中で自己と他者を何者とみているのかを表す。例えば「母親」「父親」「子供」というカテゴリーは、『家族』という成員カテゴリー集合に属している。また、例えば「教師/学生」というように、カテゴリーは対比される対を形成

することもある。そして、カテゴリー化された個人はそのカテゴリーに付随した活動や知識、関わり方を期待される。特に、対を形成するカテゴリーには義務や権利が伴ってくる。

分析としては、データとして焦点を当てている相互行為の中で、当事者が互いに重要視しているカテゴリーに注目し、どのように当該場面構造をつくりあげるのか、コンテキストや場面状況がどのように会話のあり方にある結果をもたらすのか、プロセスを詳細に記述する。

5. 分析と考察

5-1. 会話に現われたカテゴリーの特徴

Sacks の成員カテゴリー化に関する概念を用いて、対象データの会話に現われているカテゴリーを抽出したところ、「日本人／外国人」というカテゴリー対が支配的になっている場面が4回の話し合いの内、3回の大部分を占めた。「〇〇人」と個々の国籍でカテゴリー化することは、「外国人」というカテゴリー化につながっており、「日本人」と「外国人」は互いを前提として対比されるカテゴリーである。「日本人／外国人」カテゴリー対以外には、『家族』や『性別』といった参加者全員が共有できるカテゴリー集合が支配的になっていた。これらのカテゴリーは、各回の話し合いの冒頭に現われたカテゴリーがその後も主に支配的になって続いていた。

5-2. カテゴリー形成のプロセス①：「質問」によるカテゴリー化

カテゴリーの出現には質問が関与している。質問によってカテゴリー集合が明示され、その質問に返答することでカテゴリーにあてはまっていくプロセスがみられた。

会話例1 (説明上の利便性から、日本人参加者はJ、外国人参加者はFと記す)

01 J 6 : あのーえっとみなさんの国で子供を祝うようなこんなー習慣てあります？子供の成長を祝うような習慣。

02 F 1 : イランであります。 女の子9歳になると、男の子は15歳、えーと宗教の {省略}

03 J 6 : 学校でもやるし、家でもやるけど、家ではやらない人もいるということですよ。
あとー中国なんかどうですか？

04 F 6 : 中国ーの場合は、私は漢民族ですよー漢民族はだいたい赤ちゃんの方を

05 F 3 : フィリピンの場合は、生まれてえっとー

「みなさんの国で子供を祝うようなこんな習慣ありますか？」という発話01の質問に返答することで、それまで何者として話に参加していたかに関わらず、発話02,04,05でF1、

F6、F3の3人が、それぞれ「イラン人」「漢民族」「フィリピン人」になっている。この質問は、「みなさんの国」対「日本」という対比を行い、「外国人／日本人」というカテゴリ対を形成しているといえる。個々の「〇〇人」は「外国人」の下位分類であり、まずは「外国人」というひとくくりのカテゴリで表されている。

『家族』『性別』というカテゴリ集合の場面でも、同様に、質問によってカテゴリが形成されている。質問は、質問を投げかける側の想定するカテゴリを相手にあてはめる機能を果たす。また逆に質問をする側も質問していく中であるカテゴリ集合に当てはまっていくというプロセスがみられた。つまり、質問と返答という相互行為の中で、相互達成的に支配的なカテゴリ集合が形成されていくのである。

以上のような分析を行なった上で考察として、多様な関係性での相互行為への方策を探る視点で、本研究に現われた質問を「有標／無標的質問」(Maynard, 1991)という概念を用いて分類した。すると「〇〇(国)ではどうですか」等のような「国籍カテゴリ有標質問」が「日本人／外国人」カテゴリ対を形成し維持する一因となっていることが分かった。「国籍カテゴリ有標質問」が高じると、自由な発言を阻み無理に受け手を「日本人／外国人」カテゴリ対に当てはめていくという現象まで起こってくる。対等な立場での対話を目指されている「外国人と日本人の対話の場」において自由な発言を阻むことは大きな問題といえる。

逆に「△△さんはどう思いますか」といったカテゴリが提示されない「カテゴリ無標質問」に対しては、受け手自身がカテゴリを選択して返答することが可能になり、多様なカテゴリの出現につながっていた。下の会話例2では、「日本人／外国人」カテゴリ対が支配的な場面であったが、発話01で質問が「F1さんたちなんかどう？」とカテゴリを無標にして行われたことによって、発話04でF1は出身国ではどうかという視点ではなく、その時話したい立場を選択することが可能になっている。

会話例2

01 J6 : あ、分かったここでひとつの家なんだ。これとこれは {黒板の絵を指して} 別じゃなくて、ひとつの家なんだ。F1さんたちなんかどう？

02 F1 : わた [し

03 J6 : [だからこの代表として行かなければならないってこと？

04 F1 : 私、人によって一人によって見るんで、例えば夫と姑の性格とかどうですかとか、

5-3. カテゴリ形成のプロセス②: 「日本語の説明」によるカテゴリの表面化

また日本語の説明をすることによってその場のカテゴリが表面化する現象がみられた。

会話例 3

01 J 1 : 例えばなんとかさんだとか、そういう風に向こう言うわけですね。

02 F 1 : それはとてもいいです。もし、使わないとあまり

03 数人 : あー、

04 J 1 : あー、そう。あの日本は全然逆だって [いうことご存知ですね？]

05 F 1 : [そうそう、そうですね。]

06 J 1 : 日本はその自分の、身内って分かります [よね？]

07 F 1 : [うん [そうそうそう]

08 J 1 : 身内のものについては [その尊敬語敬語は使わないです。あー]

09 F 1 : [そうそうそうそう]

発話 04、06、08 では、J 1 が「日本人」であることが非常に大きな意味を持っており、そのカテゴリ付随活動として日本語の説明を行っている。F 1 は発話 05、07、09 を J 1 の発話に重複させており、この説明内容をすでに理解していることが分かる。つまり J 1 が一方的に日本語のルールの説明をすることで、「日本人」「外国人」という関係性がはっきりと表面化しているのである。

『家族』『性別』というカテゴリ集合が支配的な話し合いの回では、「日本語の説明」によって一時的に「日本人／外国人」カテゴリ対が表面化する場面もみられたが、「日本人」でなくても表記に関する説明をして、例えば「幼稚園児の親／幼稚園について知らない者」というようなカテゴリ対が表面化する場面もみられた。

以上のような分析を行なった上で考察として、多様な関係性での相互行為への方策を探る視点で、本研究に現われた日本語の説明を「日本語の所有権」（西阪, 1997）という概念を用いて分類した。「日本語の所有権」とは、「日本人」は「外国人」の日本語を誉めたり助言や評価を与えたりする資格を持っているという、一般的な期待である。すると、「日本語＝日本人が所有している」という前提での「日本語の説明」が「日本人／外国人」カテゴリ対を表面化させる一因となっていることが明らかになった。これが高じると、自由な発言を阻んだり、やりとりの内容面での探求が止まるという現象まで起こっていた。

逆に「日本語＝日本人が所有している」という前提にとらわれないやりとりは多様なカテゴリの出現につながっている。例えば、連鎖のはじめには幼稚園の「年長」の表記を尋ねられても「外国人」ゆえに答えることに躊躇していた参加者が、「長」という漢字を説明できたことに自信を得て、そのあと自ら「年少」という表記を説明して、「幼稚園児の親」のカテゴリが表面化し継続していく例がみられた。このタイプの日本語の説明は、積極的に多様な関係性を構築していく役割を果たすと考えられる。

6. まとめ

「外国人と日本人の対話の場」では、「外国人」「日本人」というカテゴリー化が多く起こっていた。そもそも場の設定自体に二項対立的なカテゴリー化を含んでいるといえるかもしれない。しかし、同じ地域社会に住んでいながら、両者が出会う場の少なさ、また対等に向き合って対話をする機会は非常に少ないという問題意識を踏まえると、まずは「対話の場」を設けることは重要な一歩であると考えられる。その上で、場の設定や環境を、どのように「外国人」「日本人」という一面的な関係性にとらわれない多様な関係性の現れる場にしていくのかという視点が必要になる。本研究では、「国籍カテゴリー有標質問」と「日本語＝日本人が所有している」という前提での「日本語の説明」が、「外国人」「日本人」というカテゴリー化を引き起こすパターンとして特定され、ここから場の設定や環境に働きかけていく示唆が得られた。具体的な示唆としては、①質問や日本語の説明行動自体に注意を向ける、②国籍カテゴリーへの過剰注目は通過点として、より個人へと焦点が向かって行くような環境を工夫する、の2点が考えられる。今後の課題としては、これらの示唆を実践に活かし、相互学習を推し進める対話や相互行為のあり方を探って行きたい。

参考文献

- 足立祐子・松岡洋子 (2001) 「地域の日本語学習支援—多文化間交流の視点からの提案—」 異文化間教育学会第 22 回大会発表抄録 pp.26-27
- 尾崎明人, 内海由美子, 岡崎敏雄, 杉澤経子, 富谷玲子, 山田泉 (2000) 「第 15 章地域における日本語教育に関する提言」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究最終報告』日本語教育学会
- 河野理恵 (1999) 『『異文化コミュニケーション』としての『日本事情』—エスノメソドロロジーからの示唆—』『21 世紀の「日本事情」創刊号—日本語教育から文化リテラシーへ—』くろしお出版
- 西坂仰 (1997) 『相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述』金子書房
- 吉川友子 (2001) 『『異文化間交流の実際』—滞日留学生と日本人の相互行為分析から』野呂香代子・山下仁編著『正しさへの問い—批判的社会言語学の試み—』三元社
- Maynard, D. (1991) The perspective-display series and the delivery and receipt of diagnostic news. In D. Boden & D.H. Zimmerman (Eds.), *Talk and Social structure* pp.164-192. Cambridge, UK: Polity Press
- Sacks, H. (1972) An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (ed.) *Studies in Social Interaction* pp.31-74.
- Sacks, H. (1995) *Lectures on Conversation Vol. I & II*, Oxford: Blackwell.
- Schegloff, E.A. (1991) Reflections on talk and social structure. In D. Boden & D.H. Zimmerman (Eds.), *Talk and Social structure* pp.40-70. Cambridge, UK

(お茶の水女子大学大学院)